

7月予報（全15枚）

病防第48号
平成20年7月2日

関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）
平成20年度発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

平成20年度病虫害発生予察予報第4号（7月予報）

平成20年7月2日
熊 本 県

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成20年6月27日福岡管区気象台発表（単位：％）

要 素	予 報 対 象 地 域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気 温	九州北部全域（含、山口県）	20	30	50
降 水 量	九州北部全域（含、山口県）	40	30	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40

2 発生予報 概要

作 物		病虫害名	発 生 量		作 物		病虫害名	発 生 量	
			平年比	前年比				平年比	前年比
水 稲	早期	穂いもち	やや多	やや多	水 稲	早植・ 普通期	ツマクノコバエ	並	並
	早植	葉いもち	並	並			ヒメトビウカ	並	やや少
	普通期	葉いもち	やや少	並			セジロウカ	やや多	並
	早期・早 植	紋枯病	並	並			トビイロウカ	やや多	並
	早期	かみシ類	並	並			コブノメイガ	並	並

作物	病害虫名	発生量		作物	病害虫名	発生量	
		平年	前年比			平年比	前年比
茶	炭疽病	ㇿ少	並	カンキツ	かいよう病	ㇿ多	並
	もち病	ㇿ少	並		黒点病	ㇿ多	並
	ㇿノカモハキ	ㇿ少	少		ミカンハダニ	並	ㇿ多
	チャハマキ	ㇿ少	並		ㇿノイサミマ	並	並
	チャノホソガ	ㇿ少	並	ナ シ	黒星病	ㇿ多	ㇿ多
	ㇿノイサミマ	並	並	カ キ	炭疽病	並	並
	ㇿノミトノメコハイ	並	並	ブドウ	べと病	並	並
	カザヲハダニ	少	ㇿ少	果樹全般	果樹カムシ類	並	ㇿ多

作物	病害虫名	発生量		作物	病害虫名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
夏秋トマト (高冷地)	葉かび病	並	並	夏秋 果菜類	コナジラミ類	並	ㇿ少
	灰色かび病	並	ㇿ少		アザミウマ類	並	並
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	並	イチゴ (育苗床)	ハダニ類	ㇿ多	並
夏秋キュウリ (高冷地)	べと病	並	並	キャベツ (高冷地)	コナガ	並	並
イチゴ (育苗床)	炭疽病	並	並	野菜全般	ハスモンヨトウ	並	並
	うどんこ病	ㇿ多	ㇿ多		オオタバコガ	並	並
キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病等)	並	並				

3 予報概要、根拠、対策等

水稻

1) 穂いもち(早期)

(1) 発生量: やや多

(2) 根拠 ア 6月の早期水稻の巡回調査では、葉いもちの発病株率は50.0%(平成5.6%)と平成より多い発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の葉いもちの発生は平成並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成より少ない予想である。

(3) 対策 ア ほ場を見回り発生状況に注意するとともに、特に葉いもちの発生が多い場合は、穂ばらみ後期に防除する。

2) 葉いもち(早植)

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 6月の早植水稻の巡回調査では、葉いもちの発病株率は0.0%(平成1.4%)と平成よりやや少ない発生であった。

イ BLASTAMの判定結果では、6月の好適条件出現日数は前年より少なかった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は概ね平成並であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成より少ない予想である。

(3) 対策 ア いもち菌は25 前後で湿度が高いときに増殖しやすい。気象条件に注意し、病勢進展が予想される場合は発生初期に薬剤を散布する。

3) 葉いもち(普通期)

(1) 発生量: やや少

(2) 根拠 ア 6月の普通期水稻の巡回調査では、葉いもちの発病株率は0.0%(平成1.8%)と平成よりやや少ない発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、苗いもちの発生は平成並~少と地域によって差が見られた。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成より少ない予想である。

(3) 対策 ア いもち病に効果のある育苗箱施用剤を使用していないほ場においては、気象条件に注意し、病勢進展が予想される場合は発生初期に薬剤を散布する。

4) 紋枯病(早期・早植)

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めていない(平成の発病株率0.0%)。

イ 気象予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成より少ない予想である。

(3) 対策 ア 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤散布を行う(要防除水準: 穂ばらみ期の発病株率20%)。

5) カメムシ類(早期)

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 上天草市松島町におけるイタリアンライグラス及びイネ科雑草でのすくい

取り調査では、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ及びシラホシカメムシの捕獲数は平年（過去5ヵ年）並であった。アカスジカスミカメ及び最重要種であるクモヘリカメムシは平年より少なかった。

イ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

（３）対策 ア 毎年被害を受ける地域では、穂揃期とその1週間～10日後に薬剤散布を行い、畦畔雑草も含めて防除する。

イ 水稻出穂後に周辺雑草を除草すると、本田への飛来を助長するので行わない。

６）ツマグロヨコバイ（早植・普通期）

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり0.3頭(平年0.3頭)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）における予察灯調査では、6月4半旬までは平年より少なかった。

ウ 病害虫防除員の報告では、6月の発生は平年並～少と地域によって差が見られた。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

７）ヒメトビウンカ（早植・普通期）

（１）発生量：並

（２）根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり0.6頭(平年0.5頭)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所（合志市）における予察灯調査では、6月4半旬までは平年並の誘殺数であった。

ウ 病害虫防除員の報告では、6月の発生は平年並～少と地域によって差が見られた。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

（３）対策 ア ヒメトビウンカでは吸汁害よりも、媒介するウイルス病（縞葉枯病）が問題となる。縞葉枯病の常発地では、育苗箱施薬剤を使用しているも本田初～中期のヒメトビウンカの発生に注意し、成幼虫の発生量が多い場合は本田防除を行う。

イ 合成ピレスロイド系剤及びカーバメート系剤で感受性の低下が確認されているので、薬剤の選定には注意する。

７）セジロウンカ（早植・普通期）

（１）発生量：やや多

（２）根拠 ア 6月の早期・早植水稻の巡回調査では、株当たり0.6頭(平年1.3頭)と平年よりやや少ない発生であった。

イ 予察灯及びネットトラップの調査では、生産環境研究所（合志市）は6月4半旬までの飛来量は平年よりやや少ない。天草農業研究所（天草市）では6月10、21、22、24日にまとまった飛来が見られたが、飛来量は平年に比べやや

や少ない。飛来源である中国南部での発生量が多いと報告されており、今後の飛来量は平年より多いと予測される。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 育苗箱施薬剤を使用していないほ場では、ほ場密度が高い場合に本田散布を行う(要防除水準：水稻移植後10日までは2～5頭/株、11日以降は6～10頭/株)。

イ プリンス剤に対して感受性の低い個体群が確認されており、薬剤の残効が短い場合があるので、育苗箱施薬剤を使用したほ場においても本田での発生に注意する。

ウ 最新の飛来情報は、病虫害防除所のホームページを参照。

8) トビイロウンカ(早植・普通期)

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年0.0頭)。

イ 生産環境研究所(合志市)の予察灯及びネットトラップ調査では、6月21日に初飛来を確認した(過去10年平均の初飛来日6月12日)。飛来源である中国南部での発生量が多いと報告されており、今後の飛来量は平年より多いと予測される。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 今後の飛来情報と、ほ場での発生状況に注意し防除を行う(要防除水準：7月下旬～8月上旬において、20頭以上/100株)。

イ アドマイヤー剤に対して感受性の低い個体群が確認されており、薬剤の残効が短い場合があるので、育苗箱施薬剤を使用したほ場においても本田での発生に注意する。

ウ 最新の飛来情報は、病虫害防除所のホームページを参照。

9) コブノメイガ(早植・普通期)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の巻葉数0.0枚/株)。

イ 天草農業研究所(天草市)における予察灯調査では、6月4半旬現在まで誘殺を認めていない。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア コブノメイガに効果のある育苗箱施薬剤を使用していないほ場において発生が多い場合は、第2世代幼虫期(飛来世代 第1世代幼虫～成虫 第2世代幼虫)に防除を行う(要防除水準：第1世代において被害株率20%以上)。

イ 最新の飛来情報は、病虫害防除所のホームページを参照。

茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、病葉は認めなかった(平年1.9葉/m²)。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比少の発生であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

- (3) 対策 ア 今後、曇りや雨の日が続き、感染に好適な条件になることも予想されるため、常発地では、摘採残葉の発病状況等に注意し、三番茶萌芽期～1葉期に防除を行う。

2) もち病

- (1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、病葉は認めなかった(平年1.1葉/㎡)。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月は平年並の発生であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

- (3) 対策 ア 二番茶に多発した茶園では、二番茶摘採後に整せん枝を行い、病葉を摘採面から除去する。

3) チャノコカクモンハマキ

- (1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉は認めなかった(平年0.6枚/㎡)。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、発蛾最盛期は平年より2半旬遅い6月4半旬であった。ピーク時の誘殺数は平年並となったが、平年より少ない発生量であった。

ウ 茶業研究所(御船町)の調査では、発蛾最盛期は平年より1半旬遅い6月4半旬で、発生量は平年比少の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。

オ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

- (3) 対策 ア 次世代の発蛾最盛期は平年(7月5半旬～6半旬)並となることが予想されるので、ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期を対象に防除を行う。通常、各茶期の摘採直後が防除適期になる。

イ 中刈り等の更新は、産卵及び生息場所を失うため密度低下に効果がある。

4) チャハマキ

- (1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉は認めなかった(平年0.1枚/㎡)。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、平年並の発生であった。

ウ 茶業研究所(御船町)の調査では、発蛾最盛期は平年より2半旬早い6月1半旬で、平年並の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少の発生であった。

オ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

- (3) 対策 ア チャノコカクモンハマキに準じる。

5) チャノホソガ

- (1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、被害葉数は2.1枚 / m² (平年6.7枚 / m²) と平年よりやや少ない発生であった。
イ 生産環境研究所 (合志市) のフェロモントラップでは、平年より少ない発生であった。
ウ 茶業研究所 (御船町) の調査では、平年より少ない発生であった。
エ 病害虫防除員のからの報告では、6月の発生は平年比並 ~ 少であった。
- (3) 対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の萌芽 ~ 1葉期に防除する。
イ 摘採間近になって三角葉巻が見られた場合は、防除せず、摘採を早めて被害の軽減に努める。

6) チャノキイロアザミウマ

- (1) 発生量 : 並
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率は12.6% (平年9.4%) と平年よりやや多い発生であった。
イ 生産環境研究所 (合志市) の粘着トラップでは、平年より多い発生であった。
ウ 茶業研究所 (御船町) の調査では、平年より少ない発生であった。
エ 発生については、地域及びほ場間で差が見られた。
オ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。
- (3) 対策 ア 三番茶を摘採する園では、新芽を加害をするため、萌芽期から1葉期に防除を行う。また、二・三番茶摘採後も摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後に防除を行う。
イ 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期にわたり被害を受けやすいので、残効の長い薬剤 (有機リン系、カーバメート系、合成ピレスロイド系) で防除する。

7) チャノミドリヒメヨコバイ

- (1) 発生量 : 並
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率は3.2% (平年3.0%) と平年並の発生であった。
イ 茶業研究所 (御船町) の調査では、平年より多い発生であった。
ウ 病害虫防除員の報告によると、6月の発生は平年並であった。
エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。
- (3) 対策 ア 新芽を加害するので、萌芽 ~ 1葉期に防除を行う。
イ チャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。

8) カンザワハダニ

- (1) 発生量 : 少
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率0.4% (平年5.4%) と平年より少ない発生であった。
イ 茶業研究所 (御船町) の調査では、平年より少ない発生であった。
ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。
エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない

予想である。

- (3) 対策 ア 発生が多くなってからは、どの薬剤も効果が上がらないため、発生初期の防除に心がける。
- イ 摘採前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

カンキツ

1) かいよう病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、新葉の発病葉率は1.5% (平年2.7%) で、平年に比べやや少ない発生であった。
- イ 果樹研究所 (宇城市) の調査 (無防除甘夏) では、春葉での初発は平年より6日早く、果実での初発も平年より6日早かった。6月5半旬の発病葉率は5.5% (平年4.0%) でやや高く、発病果率は8.0% (3.8%) で高かった。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～少で、地域によって差があった。
- エ 気象予報によると、7月の降水量は少ない予想であるが、梅雨期間中、降雨日数が多く集中的に多量の降雨があった。
- (3) 対策 ア 夏秋梢のミカンモグリガの食害痕に、本病が発生しやすいので防除を徹底し、発病した葉・枝・果実はなるべく剪除する。
- イ 果樹研究所 (宇城市) における無防除甘夏の果実の発病最盛期は、平年で6月5半旬～7月4半旬である。

2) 黒点病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、果実の発病を認めなかった (平年0%) 。
- イ 果樹研究所の調査 (無防除興津早生) では、果実での初発は平年に比べて6日遅く、6月5半旬の発病果率は58.0% (平年38.0%) でやや高かった。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生はやや多～少で、地域によって差があった。
- エ 気象予報によると、7月の降水量は少ない予想であるが、梅雨期間中、降雨日数が多く集中的に多量の降雨があった。
- (3) 対策 ア 枯れ枝が伝染源である。剪定枝を園内に放置していると発病が多くなるので園外に持ち出し処分する。
- イ 果樹研究所 (宇城市) での果実発病盛期は、7月2半旬～5半旬であるので、それ以前の感染時期に防除を徹底する。
- ウ 基本的には降水量200～250mmまたは前回散布から25～30日経過したら防除を行う。週間天気予報等を利用し、計画的に防除を行う。

3) ミカンハダニ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生葉率18.6% (平年25.5%) で平年並の発生であったが、地域によって差があった。
- イ 果樹研究所の調査 (無防除樹) では、6月5半旬の寄生葉率は4.0% (平年2

0.4%)であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比多～やや少で、地域によって差があった。

エ 気象予報によると、7月の気温は高く、降水量は少ない予想である。

(3) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準はメス成虫の寄生葉率30～40%、10葉当り5～10頭である。

イ ハダニの薬剤防除は抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

5) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、やや多～やや少であった。

イ 気象予報によると、7月の気温は高く、降水量は少ない予想である。

(3) 対策 ア 発生程度の調査は、展着剤あるいは洗剤を5,000～10,000倍に薄めてコップやビーカーに入れ、液で果実(100果)を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実態顕微鏡で虫数を調査する。調査の結果10頭以上を確認したら直ちに防除する。

ナシ

1) 黒星病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉率1.0%(平年0.8%)と平年並であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比多～やや少と地域によって差があった。

ウ 気象予報によると、7月の降水量は少ない予想である。

(3) 対策 ア 発病した葉や果実は園外に処分する。

イ 防除を徹底するとともに園の排水に努める。

カキ

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、果実の発病を認めなかった(平年0%)。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月は発生を認めていない。

ウ 気象予報によると、7月の降水量は少ない予想である。

(3) 対策 ア 発病した徒長枝は、9月以降果実の発病を多くする。発病した枝は園外に処分し、病原菌の密度を下げる。

イ 発病後の防除は効果低いので、この時期の予防散布を徹底する。

ブドウ

1) ベと病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少であった。

イ 気象予報によると、7月の降水量は少ない予想である。

(3) 対策 ア 発病後は防除効果が低いので、予防散布に努める。

果樹全般（スモモ、モモ、カキ、ナシ、ブドウ、カンキツ類等）

1) カメムシ類

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 生産環境研究所（合志市）及び天草農業研究所（天草市）の予察灯とフェロモントラップでは、チャバネアオカメムシは平年比やや多～並、ツヤアオカメムシはやや多い傾向にあった。チャバネアオカメムシは6月4半旬に、ツヤアオカメムシでは5月6半旬に誘殺数のピークがあった後、現在は平年より少なくなっている。

果樹研究所（宇城市）の予察灯とフェロモントラップでは、チャバネアオカメムシは平年より少なく、ツヤアオカメムシは平年よりやや多い。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。

ウ 増殖源のヒノキ毬果について、今年は中程度の着毬がみられ、離脱の指標となる口針鞘数も少ない。

（3）対策 ア 発生量には地域差が大きく、局地的に多発生する可能性があるので、ほ場をよく見回り成虫の発生に注意し、初期防除を徹底する。

イ 最新の誘殺情報は、病害虫防除所のホームページを参照。

野菜病害

夏秋トマト、ミニトマト（高冷地）

1) 葉かび病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率0.5%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

（3）対策 ア 発病初期から葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行い、被害葉や老化葉は除去する。

イ 肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

2) 灰色かび病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率0.1%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

（3）対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。

イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤耐性菌の出現が懸念されるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

夏秋ナス（平坦地）

1) すずかび病

（1）発生量：並

（2）根拠 ア 6月の巡回調査では、発病株率9.2%（平年1.6%）と平年比やや多の発生であったが、発生ほ場は限られていた。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 排水を図り、かん水過多とならないように注意する。

イ 初期の発病葉は早めに除去する。また、ハウスやその周辺に病葉を放置すると伝染源になるので、摘除後は速やかに園外に処分する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キュウリ（高冷地）

1) ベと病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病葉率16.0%（平年10.0%）と平年比やや多の発生であったが、多発ほ場は限られていた。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

イ ほ場の排水を良くし過湿防止に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イチゴ（育苗床）

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率1.0%）。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～少であったが、多いのは露地育苗の地域であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 **ア 育苗床（寒冷紗は雨よけにならない）の雨よけを徹底し、雨滴による病原菌の拡散を防止する。**

イ 全面マルチや高設育苗を行い、灌水や降雨時の泥水の跳ね返りを防止するとともに、株元から灌水する。

ウ 育苗ポットの間隔は広めに取り、不要な下葉などは除去し通風採光を良くする。

エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。特に、降雨後の摘葉は感染しやすいので注意する。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) うどんこ病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発病株率18.3%(平年13.5%)と平年比やや多の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 今後、菌そうが消失して目立たなくなるが、盛夏でも病原菌は潜在感染しており、秋になると再び発病する可能性がある。早めの防除で、菌密度を下げておく。

イ 多発すると防除が困難なため初期防除を徹底し、薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。発病葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ(高冷地)

1) 細菌性病害(黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の発病株率黒腐病2.8%、軟腐病0.0%、黒斑細菌病0.0%)。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや少～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 発病後の防除は困難なので、常発ほ場では予防防除を行う。

ウ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

野菜虫害

夏秋果菜類

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率0.8%(平年11.5%)と平年比少の発生、高冷地のキュウリでは発生を認めなかった(平年の寄生葉率5.7%)。高冷地のトマトでは寄生葉率が14.8%(平年2.4%)と平年比多であったものの、発生地域が限られていた。

イ 病虫害防除員からの報告では、6月の発生は平年比やや多～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア タバココナジラミバイオタイプQは、トマト黄化葉巻ウイルスやウリ類退緑黄化ウイルス(仮称)(平成20年2月4日付特殊報第3号参照)を媒介し、有効な薬剤が少ないので、薬剤の選定に注意する。

イ 「トマト黄化葉巻病」の育苗期の防除対策については別枠参照。

ウ これから定植する場合は、寄生苗を本ばに持ち込まないように注意する。

エ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

オ 施設開口部に防虫ネットを設置し、害虫の野外への飛散を防ぐとともに、

施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

カ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。
キ 薬剤散布は、使用量に注意し、薬液が下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるように丁寧に散布する。

ク 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率20.0%（平成4.7%）と平成比多の発生であったが、多発ほ場は限られていた。高冷地のキュウリでは寄生葉率4.7%（平成6.1%）と平成並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成並～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成より高い予想である。

(3) 対策 ア **メロン黄化えそウイルスに感染するキュウリ、メロン、スイカなどのウリ科作物は、育苗期からの防除を徹底する。**

イ ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップを設置し、早期発見に努める。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

エ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

イチゴ（育苗床）

1) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査（育苗床）では、寄生株率15.0%（平成9.0%）で平成比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成並～少であった。

ウ 気象予報によると、7月の気温は平成より高い予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に下位葉を重点に防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

夏秋キャベツ（高冷地）

1) コナガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、寄生株率5.0%（平成19.7%）で平成比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平成並～やや少であった。

ウ フェロモントラップによる6月の誘殺数は、阿蘇市波野と山都町鶴底で平成並であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平成より高い予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。

また、幼虫は葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の寄生株率イチゴ0.0%、トマト0.0%、ナス0.1%、キャベツ0.0%）。

イ フェロモントラップによる6月の誘殺数は、高原農業研究所（阿蘇市）とい業研究所（八代市）で平年よりやや多く、生産環境研究所（合志市）、阿蘇市波野と山都町鶴底で平年並であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵することもあり、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページ（<http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/>）を参照。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 6月の巡回調査では、平坦地のナス、高冷地のトマトでは発生は認めなかった（平年の寄生株率ナス0.0%、トマト0.0%）。

イ フェロモントラップによる6月の誘殺数は、生産環境研究所（合志市）、高原農業研究所（阿蘇市）、い業研究所（八代市）山都町鶴底で平年並であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、6月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、7月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページ（<http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/>）を参照。

「トマト黄化葉巻病」育苗期の防除対策！！

現在、促成トマト、ミニトマトの栽培が終了し、今後は次作の育苗が始まります。トマト黄化葉巻病の今後の発生を抑制するためには、感染源の除去と保毒虫のハウス内侵入を防ぐことが重要です。当面の対策として、以下の防除対策を徹底しましょう。

< 育苗期の防除対策 >

- (1) 播種 10 日以上前にハウス内・周囲の雑草を防除しておく。
- (2) 育苗施設の開口部（サイド、換気部など）には必ず防虫ネットを設置する。
なお、ネットの目合いは小さくするほど侵入を阻止する効果は高いが、高温対策に留意する。
- (3) 近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを150cm幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。
- (4) ハウス内に黄色粘着トラップを設置し、侵入したコナジラミの密度を低下させる。
- (5) ハウス内へのコナジラミの侵入状況を見ながら系統の異なる薬剤を散布し、育苗後期には登録のある粒剤をポット処理する。
- (6) 発病苗は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (7) 野良生えトマトは重要な伝染源となるので、徹底除去する。

農薬安全使用上の留意点

薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、薬剤が周辺作物へ飛散しないよう飛散防止対策を徹底しましょう。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。